

黒人奴隷の証言と信頼性

—フレデリック・ダグラスの場合—

山口善成

(2003年10月31日受付, 2003年12月1日受理)

Testimony and Reliability of a Black Slave:
A Case of Frederick Douglass's Autobiographies
Yoshinari YAMAGUCHI

(Received : October 31, 2003. Accepted : December 1, 2003)

要旨

フレデリック・ダグラスの最初の自伝『アメリカの奴隷、フレデリック・ダグラスの物語』に関しては、白人奴隷制廃止論者ウィリアム・ロイド・ガリソンらが付した序文とダグラスの自伝本文との間に「緊張関係」を認める見解がすでに自明のものとなっている。本論ではそのような「緊張関係」の中でダグラスが自らの証言、あるいは黒人奴隷の証言行為について強い自意識を持って自伝を執筆し、その自意識が自伝の中である特別なカタチを取って表出していることに焦点を当てている。これによって、奴隷制廃止論者たちとの「緊張関係」が彼の自己形成にどのような影響を与えたかを考察することが本論の目的である。

As regards Frederick Douglass's first autobiography *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*, it is widely acknowledged that there is a certain tension between the white abolitionists' editorial prefaces and Douglass's autobiographical account itself. In this essay, I focus on the way Douglass's consciousness of that tension is represented in his autobiographies. In so doing, I think it is possible to examine how that tension affected his career-long self-fashioning as a representative of former black slaves.

キーワード

フレデリック・ダグラス、黒人奴隷、証言、スレイヴ・ナラティブ、奴隷制廃止運動
Frederick Douglass, Black Slave, Testimony, Slave Narrative, Abolitionism

所属・学位

本学文化学部文化学科講師 文学修士

(Lecturer, Department of Cultural Studies, Faculty of Cultural Studies at Kochi Women's University (Master of Arts))

1. はじめに

スレイヴ・ナラティヴというジャンルにおいて、一番重要なことは何か。当たり前のことだが、それは「本当の物語」だということである。南部奴隷制の現実を公表し糾弾するという一連の奴隷制廃止運動の中に置かれた黒人奴隷の証言は、ペテンは言うまでもなく、わずかな事実の誤認さえ厳密に検証されていなければならない。なぜなら、それはスレイヴ・ナラティヴというジャンル全体の信頼性を損ない、結果として運動そのものを頓挫させてしまう可能性があるからだ。

本稿はフレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1818-95) の1845年と1855年にそれぞれ出版された二冊の自伝を主に取りあげ、奴隷制廃止運動による黒人奴隷の証言の枠づけ (framing) とそれに対するダグラスの反応について論ずるものである。⁽¹⁾ これまでのスレイヴ・ナラティヴ研究においても、奴隷制廃止運動側の編集指針が黒人奴隷の証言に及ぼした影響について頻繁に論じられてきた。ダグラスの一つめの自伝『アメリカの奴隷、フレデリック・ダグラスの人生の物語』*Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* (以下『ナラティヴ』と表記) に関する研究について言えば、白人奴隷制廃止論者ウィリアム・ロイド・ガリソン (William Lloyd Garrison, 1805-79) らの書く序文とダグラスの自伝そのものとの間に「緊張関係」を認める見解がすでに自明のものとなっている。⁽²⁾ 本論はこのような見解に異議を投げかけるものではない。ただし、本論ではダグラスが自らの証言、あるいは黒人奴隷の証言行為について強い自意識を持って自伝を執筆し、その自意識が自伝の中である特別なカタチを取って表出していることに焦点を当てている。これによって、奴隷制廃止論者たちとの「緊張関係」が彼の自己形成にどのような影響を与えたかを考察することが本論の目的である。この目的のために、まずは最初の自伝『ナラティヴ』が書かれた背景を確認し、次に黒人奴隷証言に対するダグラスの自意識を集約している登場人物サンディー・ジェンキンズを中心に自伝そのものを読み直す、という手段をとることにした。

2. 黒人奴隷証言の枠づけと『ナラティヴ』執筆の経緯

ダグラスの一冊目の自伝『ナラティヴ』の序文において、ウィリアム・ガリソンは次のようにダグラスが書いた本文の信憑性を保証しようとする。

[A lot of people who are profoundly ignorant of the nature of slavery] will try to discredit the shocking tales of slaveholding cruelty which are recorded in this truthful Narrative; but they will labor in vain. Mr. DOUGLASS has frankly disclosed the place of birth, the names of those who claimed ownership in his body and soul, and the names also of those who committed the crimes which he has alleged against them. His statement, therefore, may easily be disproved, if they are untrue. (emphasis added ; N, 8-9)

下線を引いた箇所から判断すれば、人々の疑念を払拭し『ナラティヴ』の信憑性を保証する決定的な要因は、地名や人名など誇張や空想の入り込む余地のない客観的事実だと言えるだろう。ダグラスへの手紙というかたちを取って、やはり『ナラティヴ』の序文を書いているウェンデル・フィリップス (Wendell Phillips, 1811-84) も地名や人名の提示がもたらす効果について述べている。それによると、逃亡奴隷であるダグラスは生まれた場所や主人の名前等を公表することで、再び捕らえられてしまう危険を犯してい

るとされているが、読者にとってみれば、その危険性の高さは本文の信憑性をいやがおうにも高める装置として機能するように思われる。⁹⁾

このような客観的データまたは事実の開示という大前提が『ナラティヴ』の構成に大きく影響を与えていたことは間違いない。そもそも、本来『ナラティヴ』出版の目的は地名や人名などのデータを人々に提供することにあつたからである。このあたりの経緯は二冊目の自伝『我が束縛と我が自由』*My Bondage and My Freedom*に詳しく述べられている。北部へと逃亡した後、ダグラスはガリソンらの奴隷制廃止論者たちに請われて講師として運動に参加するようになるが、間もなくして彼の証言は一部の人々の不信を買うようになったという。「彼はあまり奴隷らしく見えない」というのがその理由である。そのために彼は出生地などの個人情報を開示して、自らの証言が本物であること、すなわち自分がかつて奴隷であつたことを立証せざるをえなくなり、『ナラティヴ』の出版に踏み切つた、というわけだ。

証言内容の立証義務は何も黒人奴隷の証言に限つたことではない。当然、白人による証言もその信憑性が検証されていなければならない。言ってみれば、反奴隷制運動家はなるべく信頼性の高く、奴隷制の現実を世に証明するために有効な証言をあつめることに多くの労力を費やしていたのである。中でも当時もっとも大きな反響があつたシオドア・ドワイト・ウェルド (Theodore Dwight Weld) の編集による『アメリカ奴隷制の事実』*American Slavery As It Is* (1839) のイントロダクションには、そのような活動指針が明言されている。ウェルドはまず最初に「懸案となっている問題は法律上の問題ではなく、事実の問題である」(Weld, 7) と述べ、以下のように「奴隷制の実状を事実の例示によって証明する」という目的を明らかにする。

As slaveholders and their apologists are volunteer witnesses in their own causes, and are flooding the world with testimony that their slaves are kindly treated; that they are well fed, well clothed, well housed, well lodged, moderately worked, and bountifully provided with all things needful for their comfort, we propose--first, to disprove their assertions by the testimony of a multitude of impartial witnesses, and then to put slaveholders themselves through a course of cross-questioning which shall draw their condemnation out of their own mouths. We will prove that the slaves in the United States are treated with barbarous inhumanity; that they are. . . . All these things, and more, and worse, we shall *prove*. Reader, we know whereof we affirm, we have weighed it well ; *more and worse* WE WILL PROVE. (Weld, 9)

さらに次に引用したアメリカ反奴隷制協会の活動方針の抜粋 (ウェルドの冊子に添付されたもの) によれば、証明には「本当であることがしっかりと立証された事実、証言」を以て取り組む、とされている。ウェルドが冊子の中に収集しているのは白人による証言ばかりだが、ここまでにおいては黒人奴隷の証言の扱い方と何ら変わりはないと言えるだろう。しかし、ここでどのようにウェルドが証言の信憑性を立証しているかを見ると、両者の違いは明らかである。すなわち彼は結局証言者の社会的地位に立脚した方法を採用しているのである。

The Executive Committee of the American Anti-Slavery Society. . . announce their determination to publish, from time to time, as they may have the materials and the

funds, TRACTS, containing well authenticated facts, testimony, personal narratives, &c. fully setting forth the *condition* of the American slaves. In order that they may be furnished with the requisite materials, they invite all who have had personal knowledge of the condition of slaves in any of the states of this Union, to forward their testimony with their names and residences. To prevent imposition, it is indispensable that persons forwarding testimony, who are not personally known to any of the Executive Committee, or to the Secretaries or Editors of the American Anti-Slavery Society, should furnish references to some person or persons of respectability, with whom, if necessary, the Committee may communicate respecting the writer. (emphasis added ; Weld, iv)

二つめの下線を引いた箇所から分かるように、証言の信頼性は証言者の“respectability”によって判断されると述べられている。実際、ウェルドの集めた証言者の大半を占めるのは聖職者やどこそこの教会関係者であり、この方法を追認している。そして、このような判断基準を考慮に入れると、ウェルドが黒人奴隷の証言を収録しなかったことにもうなずける。なぜなら奴隷たちに社会的な信頼性を求めることなどできないからである。

そこで黒人奴隷の証言に関しては、ある特別な規定がなされることになる。すなわち、なるべく単純な事実だけを述べる、という証言のルールである。言い換えれば、立証できないような余計なことは言うな、ということである。なるべく単純な事実を述べるという点に関して言えば、先ほど述べたように出生地等の客観的事実を提示したダグラスの『ナラティヴ』はこの規定にきちんと則っていると見なすことができる。しかしながら、ダグラスが単純な事実だけを述べているかという点とそういうわけではなく、実際のところ彼はこのような規定に強い不満を抱いていた。次の引用はダグラスがパブリック・スピーカーとして働き始めた頃、仲間の白人運動家たちに言われたアドバイスについて述べたものである。ダグラスは絶えず彼らから「事実」だけを話すよう求められ、彼自身の「フィロソフィー」ないし「意見」を述べることは禁じられていたという。そのような処遇に対する彼の不満がこの一節から漏れ出ている。

During the first three or four months, my speeches were almost exclusively made up of narrations of my own personal experience as a slave. “Let us have the facts,” said the people. So also said Friend George Foster, who always wished to pin me down to my simple narrative. “Give us the facts,” said Collins, “we will take care of the philosophy.” . . . to go through with it [the same story] night after night, was a task altogether too mechanical for my nature. “Tell your story, Frederick,” would whisper my then revered friend, William Lloyd Garrison, as I stepped upon the platform. (B, 367)

黒人奴隷の証言に求められた「単純さ」には、社会一般の人種的な偏見が大きく影響している。ダグラスの自伝の中でも何度か言及があるが、当時スレイヴ・コード (slave code) という法体系により、いかなる黒人奴隷の証言も法的に有効ではない、と宣言されていた。なぜなら黒人奴隷は獣と同等のレベルにあり、知的・道徳的に劣った人種と考えられていたからである。⁴⁾ これは証言の選定にあたる奴隷制廃止論者たち自身の持つ偏見ではなかったかもしれないが、彼らの議論は南部社会の実状を証明するとい

う目的を第一に掲げたため、そのような黒人種に対する社会的偏見を打破することまでは手が回らなかったようである。それどころか、黒人奴隷たちの証言の信憑性を高めるために、そのような偏見を追認してしまっている。事実のみを提示することにうんざりしたダグラスが次第に黒人奴隷の証言規範から外れ、彼自身の意見を述べ始めた時、白人運動家たちは、例えばこんなことを彼に向かって助言するようになったという。

“People won’t believe you ever was a slave, Frederick, if you keep on this way,” said Friend Foster. “Be yourself,” said Collins, “and tell your story.” It was said to me, “Better have a *little* of the plantation manner of speech than not; ’tis not best that you seemed too learned.” (B, 367)

ダグラスの『ナラティヴ』は以上に見てきたような証言の規範にいったんは納まることで公表される。しかし、これほどまでに規制された自らの証言に彼の意識が向かないはずはない。実際、ダグラスの『ナラティヴ』に黒人奴隷の証言行為に対する彼の自意識の発露を読むことは十分に可能である。では、それがどのような自意識で、またどのように表れているのか、自伝の内容に踏み込んで考察を続けたい。

3. サンディー・ジェンキンスの周辺化

ダグラスの自伝研究において、奴隷時代の彼が会おう一人の同胞サンディー・ジェンキンス (Sandy Jenkins) は半ば黙殺されている感があるが、黒人奴隷の証言に関するダグラスの自意識の中では、ジェンキンスはむしろ中心的な役割を持つ存在であるように思われる。では、ジェンキンスという人物がどのように描かれているのかに注目しながら、ダグラスの『ナラティヴ』、とりわけ奴隷生活から逃亡へと至る時期についての記述を再構築してみたいと思う。

奴隷時代のダグラスはさまざまな経験を経て、次第に自らの人間としての尊厳を認識するようになるが、やがてその認識を確固としたものにさせる事件が起こる。すなわち、「ニグロ・ブレイカー」と呼ばれる白人小作農カヴィー (Covey) 氏との対決である。その対決シーンを描く際、ダグラスは読者にこう言う。「あなた方はこれまで人間がいかにかに奴隷にさせられるかを見てきた。だが今度は奴隷がいかにかに人間になるかをあなた方は見ることになるだろう」(N, 60)。さらに、カヴィーに対して勝利をおさめた後、彼は次のように高らかに宣言するのである。

[The battle with Covey] rekindled the few expiring embers of freedom, and revived within me a sense of my own manhood. It recalled the departed self-confidence, and inspired me again with a determination to be free. . . . My long-crushed spirit rose, cowardice departed, bold defiance took its place; and I now resolved that, however long I might remain a slave in form, the day had passed forever when I could be a slave in fact. (N, 65)

この勝利でダグラスは「消えかかっていたわずかな自由の燃えさし」に再び炎が点り、「自らの人間性」や「自信」や「自由への決意」を再度確認したとされている。奴隷制への抵抗と人間としてのセルフ・アイデンティフィケーションを達成する上で、この事件はダグラスの人生において非常に重要な転換点であっ

たと言えるだろう。

本論の考察にとって、この対決シーンが大変興味深いのは、問題の人物サンディー・ジェンキンスの登場がまさにこの直前にあり、ダグラスとカヴィーとの闘いに彼の存在が絡んでくる点にある。カヴィーによる虐待に耐えかねたダグラスはある日彼の農場から逃げ出し、本来の主人のもとへ駆けつける。虐待をやめるように誓願するためである。ところが主人は逆にこのようなダグラスの行為に怒りだし、すぐにカヴィーのもとへ帰るように命令する。そうは言っても、帰ったらひどく鞭で打たれることが分かっているダグラスは容易にそれに従うことができず、農場のはずれにある森に身を潜め途方に暮れることになる。最終的に彼は農場に戻り、そこでカヴィーと対決することになるわけだが、ただしその直前に彼がジェンキンスと出会っていることを見逃すことはできない。ジェンキンスはダグラスのその後の行動に対して少なからぬ影響を及ぼし、農場に戻るといふ彼の決断に動機を与えているからである。

第一義的に言って、ジェンキンスという人物は、同じ黒人奴隷仲間としてダグラスを支持する助言者である。ただし、彼の助言は一風変わっていると言わざるをえない。とりあえずダグラスの空腹を満たした後、この助言者は翌日になったらカヴィーのもとへと帰るようにと勧めるのだが、カヴィーの残忍さについては彼もよく知っているのだから、ここで一つ対策を講じることになる。それによると、ジェンキンスはこれまでずっとある草の根っこをお守りとして服の右ポケットに入れていたため、おかげで白人たちに手を上げられたことがない、したがってダグラスもそれを右ポケットに入れて持って行けばカヴィーに鞭を打たれることはないだろう、というわけである。迷信的な助言者、彼を形容するとすればそうなるだろう。

ダグラスはこのような迷信に対して徹底的に抵抗する構えを見せ、「魔法の根っこ」を勧められた時、彼はこれを拒む。なぜなら機会を見つけては勉強し、すでに読み書きを修得しているダグラスにとって、それは全く不合理なたわごとにしすぎないからである。言い換えれば、ダグラスの教養とジェンキンスの迷信は、ここではっきりとした対立概念として提示されていると見ることができる。最終的にはあまりにも熱心に勧められてダグラスの方が折れることになるが、それも「魔法の根っこ」を少しでも信じてみようと思ったからではなく、ジェンキンスの面目をたてるためだった。両者の対立が解消されたわけでは決してない。⁽⁵⁾

以上のような事情を考慮に入れると、ダグラスとカヴィーの対決に別の意味が見えてくる。つまり、ダグラスはこの闘いにおいて、カヴィーの体現する奴隷制への抵抗をしているだけでなく、ジェンキンスの迷信に対しても頑なに抵抗しているのである。あるいはむしろ、彼がカヴィーの農場に戻ったのは初めから彼と対決することを目論んでいたからではなく、ジェンキンスの「根っこ」の効果を検証し、反駁する目的からだたとさえ言える。農場に着いた時、彼はカヴィーの様子がいつもと違って穏やかであることに気づき、罰せられずに難を逃れる。この時一瞬「根っこ」の効力のことがダグラスの脳裏をよぎるが、彼はこれを断じて認めない。カヴィーが穏やかなのは、その日が日曜日、つまり安息日だったからだとして合理化するのである。さらに、その翌日のカヴィーとの対決においても、「根っこ」の威力は絶えず無視され、否定されている。カヴィーに不意打ちを喰わされた時、彼は「この時、どこからその勇気がやってきたのかは分からないが、私は闘うことを決意した」と言うのだが、その「勇気」の源についてはそれ以上のことを語らない(N, 64)。また殴り合いの最中ずっと彼は「根っこ」を持っていたにもかかわらず、その勝利は「根っこ」の威力が発揮されたためだとは決して言わない。闘いの後で彼が言うのは、先ほども触れたように、自らの「人間性」や「自信」や「自由への意志」についてだけである。そして、その彼の「人間性」は以上のことから判断する限り、教養や知性に裏打ちされた合理的精神から成っていることは容易に想像できよう。ダグラスの勝利は奴隷制の克服とともに、不合理な迷信に対する勝利でもあつ

たのである。

ジェンキンはその後の物語の進展においても引き続き登場するが、彼に対するダグラスの態度は全く変わらない。すなわち、良き友人だが、彼のやり方（つまり、迷信）は受け入れられないという態度である。カヴィーの農場を離れた後、ダグラスはフリーランド氏の農場に移り、彼はここで奴隷仲間たちと厚い友情を結ぶことになる。その仲間には当のジェンキンズも含まれているのだが、ただしその他の奴隷たちと比べ、彼は一線を引かれているように描かれている。そもそもこの奴隷仲間たちの友情は学ぶ意志と自由への志向を共有することで培われていたという。この奴隷サークルの中でダグラスは教師としての役割を担い、後になってこう述懐している。「我が親愛なる同胞奴隷たちに教育をするという仕事は、私がこれまでに恵まれた最も素晴らしい務めであった。我々は互いを愛し合い、そして安息日の終わりに彼らのもとを去らなければならないのは非常につらいことだった」(N, 71)。これに対して、この奴隷仲間の一員であるはずのジェンキンズだけは相変わらず無知で迷信深いままに描かれる。しかも、このようなジェンキンズに関する説明はページ下の脚注という欄外に追いやられているのである。以下がその脚注の全文である。

This is the same man who gave me the roots to prevent my being whipped by Mr. Covey. He was "a clever soul." We used frequently to talk about the fight with Covey, and as we did so, he would claim my success as the result of the roots which he gave me. This superstition is very common among the more ignorant slaves. A slave seldom dies but that his death is attributed to trickery. (N, 70n)

ジェンキンズは完全にダグラスのグループから排除されてしまうわけではない。ただし、ちょうどこの一節がテキストに対する脚注として周辺化されているように、巧みに隅っこに追いやられているのである。

以上のようなジェンキンズの迷信に対するダグラスの抵抗、そしてダグラスのグループ内におけるジェンキンズの周辺化が持つ意味は、さらにジェンキンズが一人の「証言者」としての役割を担う時、一層はつきりしてくる。無知で迷信深く従順な証言者像——それは白人たちが黒人奴隷の証言に無理矢理押しつけたり、そうでなかったとしても密かに要請していた規範にほかならない。ジェンキンズが体現するのは、まさにそのようなモデル証言者なのである。彼が証言者としての役割を果たすのは、ダグラスとその仲間たちが一緒に北部へと逃亡する計画を立てた時であった。計画当初、ジェンキンズももちろんそのグループの一味だったが、これまで考察してきたことから想像できるように、やはり彼は途中で計画から抜けてしまう。そしてジェンキンズはこの逃亡計画を白人農園主たちに「証言」してしまい、ダグラスらの逃亡を失敗に終わらせてしまうのである。ダグラスはジェンキンズの裏切りを悟った時のことを次のように書いている。実際に名前が挙げられているわけではないが、ダグラスらの間では疑いなくサンディー・ジェンキンズが密告者であると認識されている。あるいは、そのように読ませるようにダグラスは書いている。

We did this more to bring out the evidence against us, than from any hope of getting clear of being sold. . . . We found the evidence against us to be the testimony of one person; our master would not tell who it was; but we came to a unanimous decision among ourselves as to who their informant was. (N, 78)

白人奴隷所有者たちに迎合し、彼らに都合のいいような証言をしてしまうジェンキンズには、同じように白人奴隷制廃止論者たちの枠づけに従順に従ってしまう黒人奴隷証言者の姿が重ね合わされている。白人たちの押しつけをそのまま体現するジェンキンズは、ダグラスにとって対立項であり隅に追いやられるべき存在だったのである。逆に言えば、無知で迷信深いジェンキンズと対立し、彼を自伝の中で周辺化することで、ダグラスは白人の提示する規範に依らず、高い知性と強い精神力を備えた黒人証言者として自己を定義している、ということになるであろう。

このように見れば、ダグラスの『ナラティヴ』では、証言文書としての本来の領域を超えた、もう一つの試みがなされていることがよく分かる。すなわち、ただ単にアメリカ南部奴隷制の実状を世に公表するというだけでなく、それを語るダグラス自身の主体の確立である。多くの批評家が指摘している、ガリソンらによる序文と『ナラティヴ』本文との間に生ずるテンションはここに由来する。そして、ここまで述べてきたように、このテンションは『ナラティヴ』本文において、ダグラスとジェンキンズとの対立関係に移し換えられている。白人奴隷制廃止論者たちの枠づけに抵抗する姿勢は、無知で迷信深い一人の黒人奴隷仲間に対する抵抗として表現されているのだ。

ただし、このようなかたちで果たされようとするダグラスの主体の確立には、まだ幾分かのだかまりが残る。つまり、これではジェンキンズはダグラスの主体形成のための単なる踏み台にすぎない、ということになるからである。カヴィーとの対決前夜、疲労と空腹に苦しむダグラスを救ったのはジェンキンズであった。果たしてダグラスはそのような自分の仲間であり支持者である人間と徹底的に対立することができたのだろうか。答えは否である。ジェンキンズは以上のようなダグラスの対立項としての性質の他に、もう一つ別の役割を担っていると考えられる。ではそれはどのような役割であったのか、次節ではダグラスの二冊目の自伝『我が束縛と我が自由』も視野に入れて、論じることにする。

4. 同胞意識とダグラスの葛藤

『ナラティヴ』出版の10年後にあたる1855年、ダグラスはその自伝を大幅に改訂増補した新しい自伝を世に送り出す。それが『我が束縛と我が自由』である。私にとってこの二冊目の自伝における改訂作業が興味深いのは、以上に見てきたようなダグラスとジェンキンズの対立関係がここでも一貫して保たれているばかりか、それをより強調する方向に変更されていることである。例えば『我が束縛』では、ダグラスは「魔法の根っこ」の迷信について、「滑稽」で「ばかげている」ばかりか「悪魔との取引」であるとして、よりあからさまな嫌悪感を示している。そして以下のように、この二人とのやりとりの中でダグラスの“book learning”はジェンキンズの“divination”とはっきりと対立するものとして扱われるようになる。

I had a positive aversion to all pretenders to “*divination*.” It was beneath one of my intelligence to countenance such dealings with the devil, as this power implied. But, with all my learning--it was really precious little--Sandy was more than a match for me. “My book learning,” he said, “had not kept Covey off me,” (a powerful argument just then,) and he entreated me, with flashing eyes, to try this. (B, 281)

『ナラティヴ』ではスタンダードな英語を話していたジェンキンズが、二冊目の自伝になると、突然ブランテーション風の崩れた英語を話し出すのも、両者の相違を際立たせている。またカヴィーとの対決の

場面に関して、一冊目の自伝では「どこからその勇気がやってきたのかは分からないが、私は闘うことを決意した」と幾分曖昧なことを言っていたが、二冊目の自伝では、この時「根っここのことなんて忘れてしまい、自らの身を守るために立ち上がると誓ったことを思い出した」と明言するに至る (B, 283)。さらに農場からの逃亡計画中、ダグラスは迷信的な「魔法の根っこ」に対抗するかのようになり、それとは違ったかたちのお守りを自分や仲間のために作ることになる。すなわち、彼が自らの書記能力を活用して偽造した黒人奴隷用の通行証である。『我が束縛』では、この通行証と「魔法の根っこ」は両方とも“protection”という語で指し示されており、ここでも迷信深いジェンキンズと理知的なダグラスとの明確な対比がなされていると言えよう。最後に次の一節をご覧ください。ダグラスらの逃亡計画が失敗に終わった時、一冊目の自伝では密告者の存在をにおわせる程度のことしか書いていなかったのに対し、二冊目ではジェンキンズを名指ししているのである。

Several circumstances seemed to point SANDY out, as our betrayer. His entire knowledge of our plan--his participation in them--his withdrawal from us--his dream, and his simultaneous presentiment that we were betrayed--the taking us, and the leaving him--were calculated to turn suspicion toward him; and yet, we could not suspect him. We all loved him too well to think it *possible* that he could have betrayed us. So we rolled the guilt on other shoulders. (B, 321)

以上の例をまとめれば、自伝の改訂によってジェンキンズの無知や迷信深さは際立ち、それに対応してダグラスはよりはっきりと知的精神的に優れた主体として定義されている、と言えるであろう。

このような自伝の改訂に伴う描き方の変化の理由については、これまでの先行研究から一つの答えを導き出すことができる。一冊目の自伝『ナラティヴ』が白人奴隷制廃止論者たちの枠づけに押し込められるかたちで出版されたことはすでに触れたとおり、ウィリアム・ロイド・ガリソンらによる序文はそのような枠づけ行為を端的に示している。一方これに対して、二冊目の自伝『我が束縛』はダグラスがガリソンらのグループと袂を分かった後に書かれたものであり、その意味においてここでは以前の抑圧が取り払われ、彼は自らをより自由に表現できるようになったと推測できる。ウィリアム・アンドリュース (William Andrews) が簡潔にまとめているように、今日のダグラス研究においては、一冊目の『ナラティヴ』よりも二冊目の『我が束縛』のほうを高く評価する批評家が大半を占めているが、その主な理由はこの点にある。そして、この観点から見れば、ダグラスとジェンキンズの対立に関する描き方の変化も、このような執筆環境の変化に帰因するものと見ることもできるであろう。より自由な表現の場を獲得したダグラスは、より明確な自己表象ができるようになり、その明確な自己表象の手段としてジェンキンズとの対立関係を一層際立たせて書いたわけである。

以上でジェンキンズとの対立関係、およびジェンキンズの周辺化という、ダグラスの自伝執筆における基本的なデザインについて一応の説明はできるように思われる。しかし、先ほども述べたように、これで両者の関係を完全に説明し尽くせたとはいえない。逆説的ではあるが、自伝の改訂を経て両者の対立が際立れば際立つほど、単なる対立関係としてでは解消できない要素が二人の間に存在していることが出てくるのである。例えば、カヴィーとの対決前夜にジェンキンズ家でふるまわれた夕食の場面を、それぞれの自伝から抜き出して比べてみればこのことは明らかだ。『ナラティヴ』では、ジェンキンズの家で夕食を出してもらったという事実を簡単に言及しているにすぎない。それに対して『我が束縛』ではこの場面

をより詳しく描写し、以来多くの著名人と食事をともにしてきたが、この晩サンディーと一緒にとった粗末な夕食はこれまでの人生の中で、彼にとってもっとも楽しく、今でも記憶の中でもっとも鮮明に残っている食事だ、とさえ言っている。つまり、ダグラスは自伝を改訂する際に、ジェンキンズと自分との対立関係を際立たせるだけでなく、それと同時にジェンキンズに対する親しみの感情が滲み出るような描写をも書き加えているのである。先ほど挙げた引用からも、この傾向は確認できる。まず最初ダグラスはサンディー・ジェンキンズを逃亡計画の密告者として断定しているが、直ぐにそれを取り下げてしまい、彼に対する仲間意識をことさら強調するのだ。さらに、奴隷仲間の中でどれだけ異質なものとして描かれようと、他の誰よりもジェンキンズについての記述が特別に多いことは無視できない事実である。一方でダグラスは無知で迷信深いジェンキンズを隅に追いやり、もう一方では彼に異様な執着を見せているのである。

ダグラスが見せるジェンキンズへの執着は、簡単に言ってしまうえば同胞意識である。ただし、これは他の奴隷仲間たちと結んだような学問や自由への志向を基盤とした友情関係とは違い、アフリカという共通の原点に根ざした同胞意識である。ジェンキンズはこれまで述べてきた性格づけとともにもう一つ、ダグラスをアフリカン・ルーツにつなぐ接点という描かれ方がされているのだ。ジェンキンズが「魔法の根っこ」の話をした場面をもう一度見てみよう。

I found Sandy an old adviser. He was not only a religious man, but he professed to believe in a system for which I have no name. He was a genuine African, and had inherited some of the so called magical powers, said to be possessed by African and eastern nations. He told me that he could help me; that, in those very woods, there was a herb, which in the morning might be found, possessing all powers required for my protection, (I put his thoughts in my own language;) and that, if I would take his advice, he would procure me the root of the herb of which he spoke. (B, 280)

ダグラスは彼を“an old adviser”と定義している。この場合、“old”という形容詞は単に年老いているという意味ではなく、「古くからの、旧式の」といった意味になるであろう。そして、この「古くからの」とはアフリカから続く黒人の伝統に則っている、という意味であるように思われる。実際、ここでジェンキンズは「生粋のアフリカ人」として表象されている。またさらに深読みすれば、ジェンキンズの「魔法の根っこ」すなわち“magic roots”に関する迷信は、実は黒人の「アフリカン・ルーツ」に関連したものであったと言うこともできるのではないだろうか。ジェンキンズ＝「生粋のアフリカ人」という定義は、一冊目の自伝ではされておらず、二冊目の『我が束縛』になって初めて登場する。今引用した一節は二冊目の自伝からである。この点も自伝の改訂に伴い、ダグラスがジェンキンズを単なる対立項ではなく、一層特別な存在として位置づけようとしている例の一つと言えよう。そして、これは両者の対立関係が明確になるにつれて確固としたものになるはずだった、ダグラスの主体形成について曖昧さを残してしまうことになる。白人奴隷制廃止論者の提供するフォーマットに頑なに抵抗しようとする姿、その抵抗にともなって同胞の（無知で迷信深い）黒人を排除してしまう姿、最後にアフリカン・ルーツを基盤とした黒人共同体に執着する姿、これらが混然としている様子を我々は確認することができる。結びとしてこの曖昧さに何らかの意味づけをし、本稿をしめくくりたい。

5. 結び：黒人証言者の「例外的」な「代表」として

ダグラスの自伝を読んで最初に印象づけられるのは、奴隷として虐げられてきた黒人たちの「代表」としてのダグラスである。南部からの逃亡後、彼はほどなくしてガリソンらの運動家に見出され、奴隷制廃絶のためにパブリック・スピーカーとして働くことになる。アメリカ北部や西部、さらにイングランドの各地をまわり、奴隷制の非人間的な残酷さと未だ南部にとじこめられた同胞たちの全面開放を雄弁に説く姿は、確かに黒人の「代表」としてふさわしいと言える。ただし、その一方で彼はあまりにも「例外的」な黒人であることも否めない。例えばヒューストン・ベイカー (Houston Baker) は、ダグラスの自己形成はアフリカンとしての伝統やルーツを捨て、白人的な自己に適応することで達成されたと論じている (Baker, 27-52)。またこれまで述べてたように、自伝におけるサンディー・ジェンキンスの扱い方には、アフリカン・ルーツと距離をとろうとするダグラスの態度を読みとることができるだろう。しかし、ここで注意しておかなければならないのは、ダグラス自身、そのようなジェンキンスあるいはアフリカン・ルーツの周辺化に対して躊躇し、最終的にそれを留保していることである。このことから、ヒューストン・ベイカーの指摘にあるほど、ダグラスが自らの黒人的自己を抑圧することに無関心だったとは言えないようである。奴隷制に対する抵抗においても、また黒人奴隷の証言に課せられた規制に対する抵抗においても、彼の相手は白人ないし白人社会だった。そこで彼は相手の土俵に立って勝負をしようと試みる。ダグラスの自伝はこの闘争における彼の合理的精神の勝利の歴史として読むことも十分に可能である。しかし、その成功がもたらす効果が肯定的なものばかりではないということに彼は気づいていたのではないだろうか。それゆえに彼はジェンキンスという登場人物について、今ひとつ煮え切らない描き方をしているのではないだろうか。

本論ではダグラスの自伝の中でも、奴隷制時代から逃亡直後の時期を描いた部分に限って考察を進めてきたが、合理的精神に則った主体形成と自らの人種的共同体意識との間に生じた葛藤は、もっと時代が下った時期についての描写においても相変わらず解消されていない。晩年になって書かれた三冊目の自伝『フレデリック・ダグラスの人生とその時代』*Life and Times of Frederick Douglass* (1881; revised and expanded, 1893) の後半部分では、自らの華々しいパブリック・キャリアを記述しつつも、その葛藤が絶えず顔を覗かせているのだ。中でも象徴的なのは、最晩年、合衆国領事としてハイチに滞在した経験である。

ハイチと言えば、19世紀初頭に黒人奴隷による革命および共和国の設立が達成された場所である。しかし、独立間もないハイチではその後政権をめぐって度重なるクーデターが起り、やがて人々は黒人による共和国の維持に疑問を投げかけるようになってゆく。繰り返される暴力的な政変には「野蛮さ」が指摘され、不安定な政治状況には黒人種の「無知」や「文明的な遅れ」がその原因として挙げられるようになったという。領事としてハイチに滞在したダグラスはこの問題について何度となく意見を求められるが、彼の答えは歯切れの悪いものと言わざるをえない。基本的には、彼はハイチの独立が黒人奴隷全体の解放や地位向上に多大な影響力と希望をもたらしたとしてその功績を称えているが、それと同時にハイチ国民の無知や迷信深さに対してはしばしば苛立ちを見せるのである。この矛盾を折り合わせるができない、というのが正直なところであろう。そこで最終的に彼のとった方策は、ハイチ国民の「無知」や「文明の遅れ」という問題について判断を停止する、というものだった。ハイチ滞在中、彼はヴードゥー信仰や子供の生け贄など、本当にそのような野蛮で未開な迷信が実践されているのか調査を始めるが、これはハイチの黒人たちに浴びせられる非難を反証するものだったと想像できる。しかし、完全に反証できないことが分かったダグラスは開き直り、ハイチ国家の存続とハイチ国民の無知や迷信との関係を断ち切ろうとす

るのである。ヨーロッパ文明諸国にだって奇妙な迷信が残っているのではないか、迷信的だという理由でハイチだけが非難されるのはおかしい、というわけだ。彼は文明化しようが野蛮であろうが、将来何が待ち受けているかが、ハイチは永遠に黒人の国家であると結論づける。本来であれば、ダグラスが一番苛立ちを感じているはずのハイチ国民の風習について、彼はやはりジェンキンズの場合と同じように、最終的なところで判断を保留してしまうのである。

ダグラスが示すこの種の曖昧さは、W. E. B. デュボイス (W. E. B. DuBois) が定義したような、アフロ・アメリカンのダブル・コンシャスネス、ダブル・アイデンティティーとして説明できるだろう (DuBois, 364-65)。白人の血が混ざっていると推定されるダグラスに対しては、これまでも頻繁にこれらの用語が適用されてきた。しかし、その際ほとんどの場合、ダグラスが抵抗の手段として白人社会の価値基準を転用していたことに焦点が向けられてきた。この点でもって、ダグラスを“accomodationist”と見なすかどうかは意見の分かれるところだが、これはあくまでもダグラスの戦略に対する評価の違いであって、論点が大きく異なっているわけではない。今回のこれまでの考察を踏まえて私が言いたいのは、ダグラス自身そのような自己定義に対して迷いやためらいを感じ、それが彼の著作ににじみ出ているということである。そのためらいは白人奴隷制廃止論者たちの粹づけ行為に対して、激しく抵抗していた最初の自伝執筆の頃にすでに芽を出し、その後一步一步と社会的な上昇階段を上っている最中にもずっとダグラスの意識について離れず、むしろ次第に大きくなっていったのである。

註

- 1) ダグラスの自伝からの引用は、それぞれのタイトルを次のように省略表記し、頁数とともに括弧で示す。*Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave* (N) ; *My Bondage and My Freedom* (B)
- 2) ダグラスの自伝に関する主な先行研究は次の二冊に収録されている。William L. Andrews, ed., *Critical Essays on Frederick Douglass* (Boston: G.K.Hall, 1991) ; Eric J. Sundquist, ed., *Frederick Douglass: New Literary and Historical Essays* (New York: Cambridge UP, 1990). この他には本論では以下の研究を参考にしてしている。David Leverenz, “Frederick Douglass’s Self-Refashioning,” *Criticism* 29.3 (1987): 341-70; Wilson J. Moses, “Dark Forests and Barbarian Vigor: Paradox, Conflict, and Africanity in Black Writing Before 1914,” *American Literary History* 1.3 (1989): 637-55; Betty J. Ring, “‘Painting by Numbers:’ Figuring Frederick Douglass,” in Carl Plasa and Betty J. Ring, eds., *The Discourse of Slavery: Aphra Behn to Toni Morrison* (London: Routledge, 1994):
- 3) スレイヴ・ナラティヴにおける客観的データの開示というルールについては、Marion Wilson Starling, *The Slave Narrative: Its Place in American History* (1981; Washington, D.C.: Howard UP, 1988) 221-48; John W. Blassingame, ed., *Slave Testimony: Two Centuries of Letters, Speeches, Interviews, and Autobiographies* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977) を参照。また、当時のスレイヴ・ナラティヴの受容状況については、次の二つの書評を参照。前者はスレイヴ・ナラティヴに好意的なもの、後者は懐疑的なものである。Ephraim Peabody, “Narratives of Fugitive Slaves,” *The Christian Examiner* 47.1(1849), rpt. in Charles T. Davis and Henry Louis Gates, eds, *The Slave’s Narrative* (New York: Oxford UP, 1985) 19; “Black Letters,” *Graham’s Magazine* 42 (January 1853) : 215.

- 4) スレイヴ・コードに関しては、次を参照。William Goodell, *American Slave Code in Theory and Practice: Its Distinctive Features Shown by Its Statutes, Judicial Decisions, and Illustrative Facts* (1853; New York: Negro UP, 1968)
- 5) ヘレン・ジャスコスキーは「魔法の根っこ」に対するダグラスの反応について、私とはちがった解釈をしている。それによれば、ダグラスは無意識のうちに根っこの威力を認め、受け入れているという。Helen Jaskoski, "Power Unequal to Man: The Significance of Conjure in Works by Five Afro-American Authors," *Southern Folklore Quarterly* 38 (1974): 91-108.

【参考文献】

- Andrews, William L. Ed. *Critical Essays on Frederick Douglass*. Boston: G.K. Hall, 1991.
- Baker, Houston A. *The Journey Back: Issues in Black Literature and Criticism*. Chicago: U of Chicago P, 1980.
- Blassingame, John W. Ed. *Slave Testimony: Two Centuries of Letters, Speeches, Interviews, and Autobiographies*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977.
- Davis, Charles T. and Henry Louis Gates. Eds. *The Slave's Narrative*. New York: Oxford UP, 1985.
- Douglass, Frederick. *Life and Times of Frederick Douglass*. 1881; revised and expanded, 1893. *Autobiographies*. New York: The Library of America, 1994. 453-1045.
- *My Bondage and My Freedom*. 1855. *Autobiographies*. 103-452.
- *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*. 1845. *Autobiographies*, 1-102.
- DuBois, W.E.B. *Writings: The Suppression of the African Slave-Trade; The Souls of Black Folk; Dusk of Dawn; Essays*. New York: Library of America, 1986.
- Leverenz, David. "Frederick Douglass's Self-Refashioning." *Criticism* 29.3 (1987): 341-70.
- Moses, Wilson J. "Dark Forests and Barbarian Vigor: Paradox, Conflict, and Africanity in Black Writing Before 1914." *American Literary History* 1.3 (1989): 637-55.
- Ring, Betty J. "'Painting by Numbers': Figuring Frederick Douglass." *The Discourse of Slavery: Aphra Behn to Toni Morrison*. Eds. Carl Plasa and Betty J. Ring. London: Routledge, 1994.
- Starling, Marion Wilson. *The Slave Narrative: Its Place in American History*. 1981; Washington, D.C.: Howard UP, 1988.
- Sundquist, Eric J. *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature*. Cambridge: The Belknap Press of Harvard UP, 1993)
- Weld, Theodore Dwight. Ed. *American Slavery As It Is: Testimony of a Thousand Witnesses*. New York: The American Anti-Slavery Society, 1839.

*当初、この論考は『アメリカ文学評論』第19号（筑波大学アメリカ文学会）の紙上にて発表される予定で初校の段階まで進んでいたが、事情により当雑誌の出版が大幅に遅れることが判明し、現在のかたちで発表する運びとなった。念のため、おことわりしておきたい。